

■□ 基調講演・質疑

【北川氏】 休憩時間にチャットで質問が3点来ています。順番に質問を読み上げていきますので、多少関連している内容もあるかなと思いますので、濱田先生のほうからまとめて、できる範囲で答えていただければと思います。

一つ目は、「田老町漁協の取り組みはよく分かりました。他の漁協ではどのような取り組みをなされたのでしょうか」という質問です。「他の」というのは岩手県外という意味もあると思いますが、その辺りも含めてお答え願います。

二つ目は、「認識が間違っておりましたら申し訳ありません。宮城県の一部の地域・漁協では、知事の意向もあり、規制緩和と親和的な復興事業が進められたと聞きましたが、そのような事業が進められた原因には、宮城県の一部漁協には、田老町漁協のような歴史がなかったという理解でよろしいでしょうか」ということです。

3点目は、「貴重なお話をありがとうございました。宮城県の漁協の事例で、震災を免れた漁船を協業のために使用したとありましたが、その漁船の所有者の方が協業に使用することに対して、すぐに合意されたのでしょうか」という質問が来ています。以上3つです。濱田先生お答えのほうお願いいたします。

【濱田氏】 まず、漁協が震災復興にどう取り組んだかということですが、これについては、国の復興政策との関連、予算との関連のなかで、ほぼ一律にどの漁協も同じ枠組みで同じようなことをやっています。ただ、やり方の中身が違うものがあります。もっぱら各漁協でどういうことを

やったかというのは、それぞれの漁協の組合員さんの状況によって変わります。例えば、組合員がたくさん残るようなところと、非常に再開が少なかったところで、その取り組みの仕方が大きく変わっています。つまり、組合員が少なくなったところでは、震災前までの海の使い方と大きく変えて、もう少し合理的に使いましようってという話し合いが、以前だったらできなかったのができるようになったとかですね。

ただ、漁協の事業については、なかなか事業の在り方自体そのものを大きく変えるということは、できなかったと思います。少しだけ事例があります。宮城県のカキ養殖は共販事業で参加されている方が多いですけれども、今までの共同販売事業をやるだけじゃなくて、各個人の出荷物をより求めるところに販売していくための電子入札みたいなものを導入したりすることもやりはじめました。こういう細々とした新たな事業というのはあります。

次に、一部の地域ではってというのは、これは水産特区構想のお話かと思いますが、確かに田老町のように上手くいかなかった、それまでの歴史が全然違うものだったのかということですが、まあそうです。いろいろと理由があるのですが、地元の漁協が合併を繰り返して、今、JFみやぎという県一漁協になっていますけれども、その漁協合併が何回かあったんです。つまり隣同士で合併、その周辺で合併したということで、周辺との漁協との最初の段階の合併のときに、優良漁協と優良でない漁協があったりして、漁協は1つになったのですが、優良だった漁協が、要するに不振漁協

だった漁協の借金も背負わなくなり、他の浜との関係がすごく悪化したということもありました。そういった状況のなかで、一部の地区で知事の復興特区構想に乗る話が出たのは、まさにそういうところで、俺たちはやっぱり元に戻るんだ、みたいなことです。周辺の人たちとの関係があまり良くなかったということもあって、こういう復興特区構想に乗って、漁協から離れて企業に救われたい意向を示したわけです。つまり、この話も、結局、日常的な漁協の活動との関係が問題であったのですが、ただ、それが当時の宮城県の政策で漁協合併をやや強引に進めたってということもあって、その亀裂がそこで出てしまった、そんな感じですね。だから協同組合運動としての失敗というよりかは、合併政策の被害者でもあったと私は見ております。何も仲悪くなることもなかったのに、丁寧に進められなかったばかりに、こういう問題がこういうときに噴出してしまったということです。

3つ目ですが、宮城県でも協業したところもありますが、まったくしなかったところもあります。当然、協業にしたほうが良かったのですが、しなかったところもあります。当然、船が残った方々は文句を言っておりましたし、自分の船で本当は1人で再開したいのに、いろんな人を協業で乗せてやらざるを得ないというのは、当然不満があって、自分の船を使用することにすぐに合意されたというわけではないと思います。ただ、多くの地区でこういうやり方が進められるなかで、何と言いますか、同調圧力みたいなものはたらいたと思いますし、組合によっては組合長のリーダーシップでそういうのをまとめていったところもあります。やっぱりすぐに合意されたのかといたら、基本的にはそうではない。自分は船を走らせて津波を乗り越えて沖に出

て船を命がけで守ったのに、なぜ他の人を船に乗せて一緒に作業しなくちゃいけないのかという、この不満はたぶんすごくありました。だけど、そこはみんなでやっていくっていうこと、1つの浜単位でやっていけば不満も抑えられるということで。多くの浜がやったことで、あまり大きな問題にはならなかった、というところですよ。